

第14回 大賞(金の星賞)受賞作品

# 「うまれる」

岩手県立花巻北高校三年 小田島 夕花



賢治のまちから  
**全国高校生★童話大賞**

大賞 〈金の星賞〉

『つまれる』

岩手県 花巻北高等学校三年 小田島 夕<sup>ゆ</sup>花<sup>か</sup>

さく、さく。深雪<sup>みゆき</sup>が雪を踏む音に合わせて、背負ったランドセルから、チリチリとも「口口口ともつかない、鈴<sup>すず</sup>のような音がします。さくさく、チリチリ。深雪は楽しさなってきて、

「ふーゆや・す・み・が・こ・と・し・も・やーあつて・き・た！」

なんて、一年一組のクラスメイトの男の子たちが歌つていた替え歌を、小さく呟<sup>つぶや</sup>くように歌い始めました。けれど、深雪がご機嫌<sup>きげん</sup>な理由はランドセルからきれいな音が鳴るので、明日から冬休みだということだけではなくて、それからもう一つ、深雪の誕生日<sup>たんじょうび</sup>が三日後に迫っているからなのです。

さく、さく、チリチリチリ……。弾<sup>はず</sup>む足取りで、深雪はいつもの帰り道をすんずん歩いていきました。

さく、さく、とん、とん。玄関の前は、朝お父さんがきれいに雪<sup>ゆき</sup>かきをしたので、雪は積もつていませんでした。深雪は靴<sup>くつ</sup>についた雪をジャンプで落としました。それから右手の手袋<sup>てぶくろ</sup>を外して、コートのポケットをもぞもぞと探します。つるつるしたのはポケットティッシュだから、多分その奥に……

(あつた!)

探し当てた家の鍵<sup>かぎ</sup>でドアを開けました。

「ただいま」

小さく呟くように言ったのは、返事がないことを知っているから。靴を脱いで、マフラーを外して、それからコートを脱<sup>ぬ</sup>うと一度ランドセルを下ろすと、チリン、チリン。あの音が鳴ります。深雪はそれだけでなんだか嬉<sup>うれ</sup>しくて、早く自分の部屋でそれを手に取りたくてウズウズしてしまいます。急いでマフラーとコートをハンガーに掛けて、ランドセルを背負いなおして洗面所で手を洗つて、うがいをして、自分の部屋まで駆<sup>か</sup>け足で向かいました。





ふう。大きく息を一つ吐いて、深雪はランドセルを下ろしました。それからランドセルを開けて、中から小さな紙袋を取り出しました。チリチリ、口々口。中からあの音が聞こえます。深雪は紙袋の口を留めているシールを破かないようゆっくり剥がして、机の上で逆さまにしました。チリリン。一際大きな音を立てて、ビニール袋に入った銀色のまあるい物と、「おたんじようびおめでとう」と書かれたカードが出てきました。深雪はビニール袋をそつとつまんで、揺らしました。チリチリチリチリ……。深雪はにんまり笑いました。

(星の卵、たまご、だつて)

ほしのたまご。なんて素敵な響き! 穴が開いていない鈴のようなこの卵は、明日から家族で旅行に行くというクラスメイトの奈々ちゃんが先回りしてプレゼントしてくれたものです。

(塩水に沈めて三日くらいで生まれるんだっけ)

深雪はビニールを開けて、卵と一緒に入っていた紙を取り出しました。広げるとノートと同じ大きさになつたその紙には、丸い文字で

「星の卵の育てかた

コップ一杯の水(約一百ミリリットル)に塩一・七グラムを加え、一口飲んでから卵を沈め、月光に当てるこれを毎日繰り返してください。三日ほどで卵からかえり、空へ昇っていきます」

と、イラスト付きで書いてありました。三日でかかるなら、深雪の誕生日にちょうどピッタリです。誕生日に星が生まれるなんて、なんて素敵なんですよ!

お母さんが帰ってくるまでは宿題の時間と決めていて、いつもはきちんとそれを守っている深雪でしたが、今日ばかりは宿題なんて手につきません。卵が目につくと指でつん、とつついでチリチリと透き通るようなその音に耳を傾けていたのでした。

ガチャーン、バタン。玄関のドアを開けて閉める音と、少し遅れて「ただいまあ」というお母さんの声が聞こえました。お母さんはそれからずんずん深雪の部屋の前までやつてきて、

「深雪? 開けるよ」



と言つて、ドアを開けました。ただいま、と顔をのぞかせたお母さんが言つたので、深雪がお帰りなさい、と返すと、卵もそう言つているかのようにチリリン、と鳴りました。お母さんが部屋へ一歩入つてきて、

「何？ それ。いい音」

と尋ねてきたので、深雪はほんの少しうつむいて、

「ほしのたま！」

と、なんだか少し恥ずかしくなつてぼそりと答えました。

「え？ 何？」

お母さんは深雪のところまでズンズンズカズカやつてきて、卵をひょい、と摘み上げました。チリリン。卵が鳴ります。

「星の卵。奈々ちゃんが、誕生日に、つて」

さつきよりは少し大きな声で深雪が言つと、あらそう素敵ね、ちゃんとお礼をするのよ、とあまり興味がなさそうに返されました。深雪は少しガツ力りして、小さく溜息をつきました。お母さんはつまんでいた卵を机の上に返して

「お父さんが帰ってきたら夕飯ね」

といつものセリフを口にするので、深雪もうん、といつものように返しました。お母さんに言いたいことがもっとあつたと思うのですが、なぜだか全部ひつこんでしまつて、深雪はお母さんの背中を見送ることしかできませんでした。

その夜、深雪は寝る前にキッチンへ行って、ガラスのコップに水を注いで、塩をキツチリー・七グラム量つて加えました。よく混ぜて一口飲むと、口に入れた途端にスッと身体からだに入つて行くような、そんな不思議な感じがしました。思つたよりはしょっぱくなくて、すぐに身体に馴染む感じ。

（なんだか、懐かしい、ような）

けれど深雪はどこでこれと同じようなものを飲んだかは思い出せません。まあいかと一つ息を吐いて、コップを持って自分の部屋へ向かいいます。卵をコップの中へ沈めると、なんだか銀色のまりものようで可愛く見えます。月光に当てるためにカーテンを開けると、やっぱり少し寒くて、ベッドの富

賢治のまちから

# 高校生☆語彙大賞



に田覚まし時計と並べて卵を置くと、深雪は「ロン」と横向きに丸まつたよ  
うな体勢で目を閉じました。

深雪の枕元では、月光を浴びた卵が、いすれ自分が昇つていふことになる  
夜空を見上げて淡く輝いていました。

深雪は夢を見ました。どこか真っ暗で温かい、この上なく安心できるところ  
で、深雪はじっとしていました。どこからかお父さんとお母さんの声が聞  
こえます。何を言っているのかはわかりませんが、その声はじこまでも穏や  
かで、優しくて、深雪はとても幸せな気持ちでした。

そんな夢を、深雪は朝起きてからも鮮明に覚えていました。今日から冬休  
みだからそんなに早く起きる必要はないのに、お母さんに布団をはぎ取られ  
て、震えながら廊下を歩きながら、深雪は、変なの、と思いました。  
(起きてもこんなにくつきり覚えている、そんな夢を見たことなんていままで  
あつたかしら?)

次の夜も、深雪はコップの水を一度捨て、また塩水を作つて一口飲みます。  
身体にスッと馴染む感じがするのは、きっと前にどこかで飲んだから。じゃ  
あ一体どこで? 答えはその夜も出ません。深雪は前の夜と同じようにコッ  
プを置いて、丸くなつて眠りにつきました。卵は今日も月光に照らされて、  
コップの底でキラキラ 蹴つっていました。

そして深雪は、また同じ夢を見ました。暗くて、温かくて、優しい、幸せ  
なあの夢です。やつぱり起きてからも鮮やかに思い出せます。

(変だわ)

深雪は俯いて考えます。変な夢を、一日連続で見るなんて本当に変です。  
温かくて暗い、あんな場所を深雪は知りません。知らない場所をどうして夢  
に見るのでしょう? 答えは出ません。悪夢じゃないだけマシだわ、と結論  
付けて、小さく欠伸をしました。大体、今日はそんなことに時間を取られる  
わけにはいかないのです。

(だって、今日は誕生日だもん)

そんな日に楽しくもない考え方間に時間を使って、一体何の得があるでしょ  
う?



誕生日は楽しい」と頭をいつぱいにしておくのです。寒い冬の廊下を、朝ごはんを食べに足取り軽く歩きます。向こうからお父さんが大きな欠伸をしながら歩いてきます。深雪は小走りに寄つて行き、「お父さんおはよう!」

と声をかけました。お父さんは欠伸交じりに「おはよお」

と返します。それだけ? 何かほかに何とは? と深雪が尋ねると、お父さんは、さあ、ほかに何かあつたつけなあ、ととぼけました。深雪がふん、とそっぽを向くと、お父さんは慌てて、「嘘だよ。お誕生日おめでとう」

と言いました。深雪は満足してダイニングのドアを開けます。中ではお母さんが目玉焼きを焼きながらお父さんと自分のお弁当を作っていました。

「お母さん、おはよう」

深雪がお母さんの背中にそっと声をかけると、お母さんはテキパキ働きながら、「おはよう。悪いんだけど早く食べちゃってくれる? お母さん今日ちよつと疲ぐから」

と言いました。お父さんと深雪は向かい合つてご飯を食べました。お母さんからの「おめでとう」は夕方か夜になりそうです。深雪は少し寂しい気持ちで「ちやうせーも、と手を合わせました。

今年の誕生日は残念ながら平日だったので、お父さんとお母さんが仕事へ行つてからは、深雪は午前中は宿題、午後は友達と遊ぶという、冬休みの何でもない日の過ごし方をしました。一緒に遊んだ子たちからは沢山の「おめでとう」をもらつて、遊び尽くした深雪は雪まみれで夕方家へ帰りました。雪を払つて玄関を開けて、ただいまと言つても返事をくれる人が居ないのはわかつていましたが、それでもやつぱり気持ちはしぶんでしまいます。しほんだ気持ちのまま手洗い・うがいをして自分の部屋に入ると、田代まし時計の隣の卵は昨日とも一昨日とも変わらずコップの底に沈んでいました。(ただの鈴だつたのかな……)

深雪の気持ちは更にしほんでしまいます。折角の誕生日なのに。深雪は深く溜息ためいきをついて、ふと窓を見ました。外では雪が音もなく降り始めいました。

ガチャン、バタン。玄関のドアが開いて閉まる音ねがしました。お母さんでしょか。今日はさすいぶん遅かつたな、と思いながら、深雪は玄関へ向きます。お母さんに「おめでとう」を言つてもらひうためです。

「おかえり」

ただいま、と答こたえたのはお父さんでした。左手にはケーキらしき箱。(お母さんのほうが遅い?)

なんだかおかしいな、と深雪は思いました。お父さんは箱を深雪に預けてコートを脱ぎながら、お母さんは? とききました。まだ、と首を横に振りながら深雪が答えると、お父さんは、え、と短く言いました。お父さんもお母さんが遅い理由を知らないようです。

「まこつたなあ」

じつしたんだらうね、と深雪とお父さんは顔を見合させました。「玄関は寒いし、とつあとづかビングでテレビでも見てゆつくり待とう」とお父さんが靴くつを脱いで立つので、ケーキを冷蔵庫にしまつて、二人はのんびりお母さんを待つことにしました。

それから二十分ほど経つたでしょか、ピルルルルルル、と電話が鳴りました。お父さんが受話器をとつて電話に出ました。会話の様子から、相手はお母さんらしいことがわかります。お父さんは電話に向かって、えー、とか本当に? とか言つていきました。何かあつたのでしょうか。深雪は不安になりましたながらお父さんを見つめしていました。

「お母さんな、ひどい雪で帰り道が埋うまつちやつてるみたいで」だから先にご飯食べててつて。電話を切つたお父さんは深雪を振り返りながら言いました。

「カレーでも作るか」

お父さんはやたらと明るく言いました。

「お父さん、料理できるの?」

深雪はお父さんが料理をしてくるところを一度も見たことがありません。

「できるできるー。お父さんはなあ、お母さんと結婚する前は毎日自分で」  
飯つくつてたんだ」

わはは、と笑いながら、お父さんはキッチンへ向かいました。

それから二人は、お父さん特製の、ちょっと辛いカレーを向かい合つて食べました。特に会話はなくて、スプーンとお皿の音がやたらと響きます。

「深雪が生まれた日も、こんな風に雪がどつさり降つてたなあ」

お父さんが不意に呟きました。深雪がふうんというと、お父さんはしみじみ、といった様子で続けました。

「お父さんな、出産に立ち会おうと思って張り切つてたんだけど、お母さんに『気が散るから来ないで』って言われて、ずっと廊下で待つてたんだよ。中からはお母さんの苦しそうな声が聞こえてくるしー」

お父さんはずっと話し続けました。深雪が生まれた日のこと。名前の由来。全部話してから、ふう、と大きく息を吐いて、呟くよつて言いました。

「お母さん、遅いな」

「そうだね。……ケーキ、明日にしよう」

結局、お風呂に入つて寝ることになりました。これでは本当に冬休みの何でもない一日と変わりません。深雪は自分の部屋をぼんやり見まわしました。(卵もかえらないし)

やつぱり、本当にただの鈴だつたのでしょうか。これ以上待つても無駄なのでしょうか。深雪は悩みました。あきらめる? それとももう少しねばつてみようか。

(……今日で終わり。今日水をかえて生まれなかつたら、あきらめよう)

そう決めて、コップを手に部屋を出ました。口にした塩水は、微かに悲しい味がしました。

それから深雪は、今夜もベッドの上にでもあるくなつて田を閉じました。

深雪は夢を見ました。いつも暗くて暖かい場所です。けれど今日は、深雪はなんだかうずうずしていました。

(早く、早く)



## 賢治のまちから 高校生☆語彙大賞



深雪はそうするのが正解だと知っているように、何の迷いもなくぐるり、と回転して、なんだか狭いところに頭から入って行きました。遠くでお母さんの苦しそうな声と、知らない男の人と女の人の声がします。

(早く、早く)

ゆっくり、ゆっくりと深雪は進みます。お母さんの声は進むたびに更に苦しそうになつていきます。

(早く、早く)

「ここから出でていかないよ。ぐるぐる回りながら、深雪はじれつたいほどにゅっくり進みます。ひー、ひー、ふー。お母さんの不思議な呼吸音が聞こえてきます。ひー、ひー、ふー。合わせて深雪も進みます。ひー、ひー、ふー。ひー、ひー、ふー。不意に頭が狭さから解放されました。

(あとちょっと、あとちょっとでー)

知らない男の人の声がして、深雪の頭に何かが触れました。ひー、ひー、ふー。ひー、ひー、ふー。ゆっくり、ゆっくり、肩、お腹、足と、深雪は生まれ出来きました。ふわり、と誰かに持ち上げられた感覚。深雪は違う、と思いました。

(違う。これはお母さんの手じゃない！)

お母さん、お母さん！ 深雪は必死に叫びました。お母さん！ 叫びながら深雪は温かい液体の中にどふん、とつけられて、何か布のようなもので拭われました。その間中お母さんを呼び続けました。宥めるような女の人の声がしましたが、そんなのは関係ありません。お母さん！ 不意に深雪は温かい何かの上に下ろされました。あ。何の根拠もなく、でも確信をもつて深雪は思いました。

(お母さんだ！)

お母さんはゆっくりと深雪の背中に手をまわして、泣いているみたいな声で何かを言いました。

ガチャーン、バタン。玄関のドアを開けて、閉めるような音で深雪は田が覺めました。ふと見上げた空は、青と藍色の絵の具で作った色水のようだ、透明に青い色をしていました。時間を見ようとベッドの窓を見ると、コップの底で、月光が取り残されたように卵が柔らかく光りながら蹲っていました。

# 賢治のまちから 高校生☆語彙大賞



「あ、」

ふらふらと卵が揺れて、光が徐々に徐々に表面の一点に集まつてしまます。そして、光と卵が完全に分かれた次の瞬間。

シユン。

光の尾を引いて、何かが窓を突き抜けて空へと昇つて行きました。深雪の星です。深雪は何も言えず、ただポカンと星が飛んでいった空を見つめいました。

思い返せば、あの夢は卵を育てるようになつてから見るようになつたのでした。

(だからきっと、あの夢は卵が見せたんだわ)

それは自分を育てる母である深雪への、たつた一つの星の恩返しでした。

トントン。誰かがドアをノックしました。ハツと深雪が我に返つてドアを開けると、そこにいたのはお母さんでした。深雪はさつきの夢を思い出しました。あんなに苦しそうにしながら、深雪を産んでくれた、お母さん。深雪はぎゅう、とお母さんのお腹に抱き付いて、頭をぐりぐり押し付けながら、「産んでくれて、ありがとう」

と呟きました。思つた以上に泣きそうな声が出て、深雪はなんだか恥ずかしくなつてさらに頭を押し付けます。お母さんは一瞬びっくりしたように動きを止めて、それからゆっくり深雪の背に手をまわして、

「いいえ。こちらこそ、生まれてくれて、ありがとう」

と、ゆっくり、かみしめるように言いました。

明け方の空へ昇った星はどこかへ消え、深雪の部屋の窓から日が差してきました。明るくて、冷たくて、清らかな、深雪が七歳になつて初めての、朝です。